

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：34516

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12286

研究課題名（和文）女性がんサバイバーの療養生活体験に基づいたサバイバーケアプランの開発

研究課題名（英文）Cancer Survivorship Care Plans based on experience of female cancer Survivors

研究代表者

新井 香奈子（ARAI, KANAKO）

園田学園女子大学・人間健康学部・教授

研究者番号：00364050

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究にて明らかになった長期生存の女性がんサバイバー特有の療養生活上の体験・療養行動に影響する要因は、家事・育児・介護という事柄であった。これらは、治療選択時の意志決定や家族の健康に今まで以上に神経質になるという行動に大きな影響をもたらしていた。また、女性がんサバイバーの社会復帰の視点は、仕事への復帰だけではなく、子のPTA活動への参加、ママ友との交流、主介護者や副介護者としての介護への参加などを意味していることが特徴的であった。

以上から、女性がんサバイバーの生活者としての希望や体験に寄り添った支援をサバイバーケアプランに盛り込んで行くことが重要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在のところ、女性がんサバイバーに焦点を当てたサバイバーケアプランの研究は日本において見当たらない。

女性が社会や家庭で担う役割や女性に特徴的な心理的側面、女性特有の症状緩和の方法など、様々な要因ががんサバイバーの日常生活や療養行動、社会復帰に影響していること等、女性がんサバイバーのサバイバーケアプランを考慮する際に重要な視点が明らかになった点は、社会的に意義深いと考える。

研究成果の概要（英文）：The factor which influences an experience of female cancer Survivors which became clear in this research was a matter as housework, care for child and elderly people. These brought influence on the decision making which is at the time of treatment choice and the behavior which becomes the family's health nervously. The angle of the social comeback was participation in child's PTA activity as well as return to work, an exchange with a friend and participation in care for elderly people.

I think that cancer Survivorship Care Plans based on experience of female cancer Survivors was important.

研究分野：地域看護学

キーワード：がんサバイバー 療養体験 サバイバーケアプラン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

我が国では、年間 86.5 万人ががんに罹患し、1981 年以降の死因の第 1 位であるがんにより年間 36.8 万人(2014 年)が死亡している。その一方、5 年相対生存率(2006 年～2008 年)は、男女計で 62.1% (男性 59.1%、女性 66.0%) と上昇しており、女性の 5 年生存率をがんの部位別に見ていくと、5 年生存率(70%以上)のがんは、高い順に甲状腺がん、皮膚がん、乳がん、子宮体がん、喉頭がん、子宮頸がん、直腸がんである。現在の日本におけるがんサバイバーは、500 万人以上いると言われており、部位別に過去と比較するとほぼ全てのがんでこの 5 年生存率は上昇し、早期発見、治療の進歩に伴い、今後ますます長期生存者が増えることが予測されている。

日本では、2004(平成 16)年の“第 3 次対がん 10 年総合戦略”に続き、2007(平成 19)年にはがん対策基本法が施行され、がん医療の均てん化やがん患者の生活の質などの関心がますます高まり、がんサバイバーという言葉が使われるようになってきた。1985 年 Mullian は、自らの闘病体験を基に“がんと診断されたときからがんサバイバーである”と定義した。この概念を受け、NCCS(米国がんサバイバーシップ連合)は、“がんサバイバーは、がんの告知を受けた個人がその生涯を全うするまでを意味(1986 年)”し、その後、“その家族、友人、ケアに当たる人々などもその影響を受けるので、彼らもサバイバーに含まれるべきである(2006 年)”と提案している。

その後 Hewitt らは、がんサバイバーシップの対象は、“治療完了後の無病状態、がん治療の影響に伴う慢性的・間欠的に管理が必要な長期生存している人々”としている。北米諸国では、がん治療完了後に医療から離れ日常生活に戻った後も、治療後の副作用や晩期症状のフォローアップ、再発予防、2 次がんの早期発見など、がんサバイバーのニーズに見合ったケアが提供されている。日本では、2012(平成 24)年“がん対策推進基本計画の変更”があり、“がんになっても安心して暮らせる社会の構築”の中でがん患者の就労の問題が掲げられるようになった。しかし、治療完了後のがんサバイバーが直面する問題(健康な生活の維持、治療後の副作用や晩期症状のフォローアップ、再発および 2 次がんの早期発見)の支援は明確に掲げられていない。Findley らは、日本などのアジア諸国では、長期生存がんサバイバーに焦点を当てたケアプログラムが開発されていないと指摘している。三浦らの研究(2012・2013)においても、日本の看護師は、米国の看護師と比べ、患者の喪失した身体機能、症状マネジメント、意志決定、家族の支援への関心は高いが、患者の健康増進、就学、就労、経済的な問題への関心は低い状況であった。また、日本のがん看護師は、診断時や治療期、もしくは緩和ケア、および終末期ケア時に病院内外および在宅医療・訪問看護現場での実践を担っている事が多く、外来での化学療法や放射線治療に関わったとしても治療完了後の特に長期生存のがんサバイバーに接する機会は少なく、がんサバイバーシップケア提供の機会も少ないと考えられる。米国の IOM が推奨しているサバイバーシップケアの対象は、初回のがん治療が完了し、医療・看護から離れるようになるが、後遺症のマネジメントや再発のリスクの対応などのケアが必要なサバイバーである。日本の診療報酬では、長期生存がんサバイバーの再発リスクへの対応や 2 次がんの予防対策は圏外にあり、長期生存がんサバイバーの自助努力に委ねられていると考えられる。

近年では、外来通院時に病院内の図書室を利用することや看護相談、情報提供などの支援が各医療機関で始まっているが、現在外来通院の状況にない長期生存がんサバイバーに特化した支援は十分ではない。

長期生存のがんサバイバーが増加する中、長期にがんとともに生きる人がよりよく生きるためには、看護としてどう支援できるのかを考える必要があり、看護の課題であると考え。特に、私達地域ケアを基盤とする看護職は、がんとともに生き・生活する人の身近にある看護であるか

からこそ、今できることはなにかを考え必要な援助を提供していく必要がある。

がん治療終了後、生活に長期的な影響を及ぼす合併症や副作用には様々な症状があり、治療後の就労および生活支援への介入ニーズは高いにもかかわらず、治療後の生活への影響に焦点を当てた研究はほとんどない。2007年 Hewit は、がんサバイバーを支援する一つの方法として、サバイバーシップケアプランを提唱している。ケアプランは、治療完了後の生活への個別の「ロードマップ」であり、これにより、サバイバーは自身のケアをよりコントロールできるようになるとしている。また、後遺症や長期的な影響とその治療、年齢に適した健康管理、がん診断にまつわる社会的、経済的、心理的影響などの問題に関する情報をサバイバーに提供するものでもあるとしている。

日本では、長期生存がんサバイバーに焦点を当てたサバイバーシップケアプランの研究は現在のところ見当たらない。中でも、長期生存の女性がんサバイバーに焦点を当てた研究は皆無である。研究者らは、女性の社会進出が増える中、家庭で担う役割（例えば家事や育児など）や女性に特徴的な心理的側面、女性特有の症状緩和の方法などを明らかにし、またこれら様々な要因ががんサバイバーの日常生活や療養行動、社会復帰にどのように影響しているのかを明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究の目的

そこで本研究の目的は、長期生存の女性がんサバイバーに特徴的な療養生活体験や療養行動、および日常生活や社会復帰に向けての状況とそれらに影響を及ぼす要因について明らかにし、サバイバーケアプラン策定の資料とすることであった。

## 3. 研究の方法

### (1) 対象

がん(悪性新生物)と診断の後、治療終了後5年以上経過の女性がんサバイバー10名程度

### (2) 調査方法

研究デザイン：半構成的面接法による質的研究デザイン

研究参加者の募り方

H 県近隣県にあるがん患者団体に対し、研究協力依頼書、女性がんサバイバー用研究協力書類一式【研究協力依頼書、同意書、インタビューガイド、同意撤回書】1セットを送付する。手元に届いた頃を見計らい、研究者より各団体代表者に了解を得て、電話もしくは訪問による口頭での説明の時間をいただく。

各団体代表者に対する説明により研究の趣旨を理解していただき、協力を得られる場合、長期生存の女性がんサバイバーに研究協力書類一式【研究協力依頼書、同意書、インタビューガイド、同意撤回書】を配布いただく。配付資料は了解を得られた後送付する。

研究協力の希望を表明した方に対しては、日程・場所などを調整し、再度文書と口頭にて研究協力に関する説明をし、書面による同意を得てからインタビューを実施する。

インタビューの方法と調査内容

研究参加者1名に対して、研究者(女性)1~2名でインタビューを実施する。1回60分程度の半構成的面接法とし、インタビューガイドを用いて行う。面接場所は、研究者が勤務している大学や研究協力者の希望するプライバシーが確保された個室にて実施する。

調査内容は、がんおよびその治療に関する受け止め、療養生活や社会復帰を送る中での思いや意志決定について、現在の状況等である。

研究参加者の承諾を得て、インタビューの内容の録音、メモを取る。インタビュー内容の確認を要することが生じた場合、研究参加者の承諾を得た上で、電子メール、電話などで補足的に確認をさせていただく。また、研究参加者の希望が合った場合、再度面談の場所と時間を調整させていただく。研究参加者の希望があれば、逐語録を確認することができる。

#### 分析方法

面接時に IC レコーダーに録音したデータを、テープ起こし業者に委託し逐語録を作成する。逐語録の内容を繰り返し丁寧に読み、逐語録に起こしたインタビューデータについて、インタビューガイドの項目に沿って分類し、内容の共通性や異質性を抽出しコード化、カテゴリー化する。逐語録の作成は個人情報保護を遵守している業者( プライバシーマーク付与事業者 )に委託する。なお、研究の全過程において、研究者間で検討を重ね、解釈の妥当性を高める。

#### 本研究の意義

本研究に取り組み、長期生存のがんサバイバーの療養体験の現状と課題を明らかにすることは、女性ががんサバイバーが自分らしく生きていく過程を支えるサバイバーケアプラン策定のための資料となる。5年以上経過の女性ががんサバイバーと家族員が、より質の高い生活を維持できるよう看護者として支援するためには、それぞれがどのような体験をし、どのように意味づけながら療養行動を行い、さらに社会復帰に向けた一步を踏み出しているのかを知ることが必要である。

#### 倫理的配慮

調査にあたり、所属に倫理審査申請書を提出し、承認を得て実施した。

#### 利益相反

本研究を遂行にするにあたり利益相反はない。補助金管理も事務委託であり、管理状況に問題は生じない。

## 4. 研究成果

### (1) 治療中（入院から外来治療中）の主な体験

医師との関係性の難しさに翻弄する

- 医師に気を遣いながらで十分に言いたいことが言えない
  - 唐突で親身でないように感じる医師の態度
  - 医師間の連携の不十分さに翻弄する
  - 医療職の態度に一喜一憂
- 抗がん剤治療を受ける中で揺らぐ思い
- 治療スケジュールが予定通りに進まない
  - 抗がん剤治療の実施判断が診療グループ間で異なる
  - 治療するかしないかの最終判断をするのはあなたと迫られる
  - 患者が必要な情報が医師から十分に提示されない
- 治療薬が制限されていく中での苦悩
- 腫瘍マーカーの値に一喜一憂
  - 抗がん剤治療中は集中砲火できるよう体調・体制を整えたい
  - 常にアンテナを張り巡らした中での抗がん剤治療
  - お金あつての治療（命）
- がん治療を行う中での孤独感
- 親身でないように感じる家族の態度

- 家族に負担をかけたくない
- 自分1人という孤独感
- 自分の気持ちが家族にも理解されない思い  
がん治療の中での支え
- 治療中の看護師の存在
- 友人、がん友、患者会の存在  
再発・診断の時期に対する消えない後悔とがんと共に生きる
- 精一杯生きたい
- がん治療に伴う生活の質の低下
- がん診断後の生活での心がけと先の見通しが立たない生活
- 溢れる情報に圧倒する  
自分の体験を他者に伝えたい
- がん患者に伝えたい思い
- 社会に対して伝えたい思い

#### (2) 療養生活や療養行動に影響する要因

多く語られたのは、子の年齢とそれに伴う育児、および家事であった。常に子の学校行事に焦点をあてながら治療スケジュールをシュミレーションし、夫との調整を図っていた。体調を整え、抗がん剤治療に集中砲火し、体調改善の時期を子の行事に重なるよう調整する発言が多く聞かれた。サバイバーの年齢によっては、老親の介護と治療選択を調整している状況もみられた。

#### (3) 社会復帰の視点

がん治療後の社会復帰においても、子に関連した事柄への参加の発言があった。自らの子の行事への参加から、PTA活動など学校行事全体への参加など、行動範囲を広げられることで社会復帰を感じていた。特に、子どもに関連した父兄との交流開始は、どの対象者も一時期音信不通になるなどの高いラインがあった。このラインは、仕事をしているサバイバーよりも、主婦であるサバイバーの方が強固であるようであった。以上から、サバイバーケアプランを検討する際には、サバイバーの生活者としての体験を十分に聞き、寄り添い、治療前の診断された時からサバイバーケアプランをともにパートナーとして作成していくケアマネジャーの存在が重要であると思われた。このケアマネジャーは、生活も身体もみることのできる看護職者が望ましいと思われた。

#### (4) 地域の看護相談所に対するニーズ

看護免許のある研究者が利害関係のない中で、インタビューを実施させていただき、対象者が話すことで自身の気持ちの整理や社会復帰につながったと回想する対象者もおられた。以上から、地域の中にいつでも話す事ができる場(看護相談所)を作ること、そして、患者が話したいときに継続して来られる関係性を作ること重要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 新井香奈子, 森本喜代美
2. 発表標題 訪問看護ステーション所属の認定看護師によるがん看護相談室での相談内容とニーズ
3. 学会等名 日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森本 喜代美  (MORIMOTO KIYOMI)  (90616046)	聖泉大学・看護学部・講師    (34203)	